

10 三次救急病院における 泌尿器科漢方使用の実際

旭川赤十字病院 泌尿器科

宮本 慎太郎、中山 奨、田端 秀敏、堀田 裕

【背景・目的】旭川赤十字病院は道北を中心に、約200km圏内の3次救急医療を担う救急救命センターであり、入院患者の半数以上は予定外入院である。外来診療は予約制・紹介制であり、検査や処方継続のみで安定した症例は積極的に近隣クリニックなどに紹介している。年間手術件数は700-800件程度で、泌尿器癌および尿路結石の手術が多い。また、常勤泌尿器科医師(3-4人)に東洋医学的な診療に精通した者はいない。そのような施設の泌尿器科において、漢方薬が実際どのように使われているかを調査した。

【対象・方法】当院における漢方製剤の採用状況を確認した。2014年～2023年の期間に、当科医師が漢方製剤を処方した症例を対象とし、使用製剤の種類、使用目的、効果、継続状況などを調査した。効果については診療録記載より判断した。

【結果】当院で採用されている漢方製剤は46種類(うち36種類は院外採用のみ)であった。当科で処方された漢方製剤は18種類であり、症例は517例であったが、他院・他科よりの処方継続を除き、主体性をもって行われた処方では16種類、463例(89.1%)であった。四診を行い「証」に合わせて処方を行った症例はなく、すべて症状・病名に対する処方であった。主体的に処方された製剤で最も使用人数が多い処方は大建中湯の111例(24.0%)であり、主に腸管利用手術後のイレウス予防が目的であった。その他、猪苓湯76例(16.4%)、桂枝茯苓丸60例(13.0%)、清心蓮子飲51例(11.0%)、芍薬甘草湯50例(10.8%)、八味地黄丸38例(8.2%)、牛車腎気丸35例(7.6%)、柴苓湯24例(5.2%)などが処方されていた。使用目的は、癌治療または癌自体による症状・合併症に対するものが209例(45.2%)、慢性膀胱炎、CP/CPPSなどの下部尿路症状が159例(34.3%)、尿路結石症が61例(13.2%)、その他の泌尿器科疾患が6例(1.3%)、泌尿器科と関連のない症状・疾患は28例(6.0%)であった。治療効果は、あり150例(32.4%)、なし99例(21.4%)、不明214例(46.2%)であった。効果が確認できた症例が多かったものは、下部尿路症状に対する牛車腎気丸、清心蓮子飲、八味地黄丸、猪苓湯などであった。継続状況については継続75例(16.2%)、廃薬76例(16.4%)、中止・変更224例(48.4%)、感冒に対する葛根湯などのようなスポット使用70例(15.2%)、未受診18例(3.8%)であった。

【考察】当院の日常臨床において、漢方製剤は癌治療の一環として処方されていることが多かった。下部尿路症状に対する処方は、症状・病名に対する処方でも一定の効果を得られる症例はあるが、より効果を上げ、不要な処方を減らすには、やはり東洋医学的知識に基づく診療を行ったうえでの処方が望ましいだろう。また、漢方製剤の治療効果については不明な症例が多かった。効果判定の記載がない、継続・中止となった場合も理由が明記されていない等、西洋薬処方ではあまり見られない問題が浮き彫りになった。